

Title	森耕二郎著 労賃学説の史的発展
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.7 (1928. 7) ,p.1013(139)- 1016(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280701-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

而してこは單にこの章節に對するのみに非ず、同じ事を第五章、聚落の發達に關する説明に關しても言ふを得べし。余は從來學者が、之らの順序をとかく曖昧のまゝに看過し、突如各時代の特徴を述べて、敢てその史的經過に關する説明をなほざりにし居るを常に怪慚に堪えざるなり。而もこの説明こそ經濟史本來の職責にして、かくの如き困難なる研討考究こそ學徒本正の責務ならずや。余は第二分冊以下の完結を待ちて、これらの點に關する博士の愈々眞摯なる新研究の結果を伺はむと欲す。茲にはたゞ師の所謂五難說に對する博士の批評を見て、『日本經濟史』研究に對する平素抱くところの卑見を述ぶるに好機會と信じ、聊かその事に關聯して缺禮を重ねたる次第なり。若しも以上の一文が却つて博士の勳を述ぶる事少くしてその然らざる點を指摘すること多きにあらむか、然らばそはたゞ余一個の不徳の致す所のみ。『日本經濟史』に對する眞摯なる一學究の文辭、幸にして之を諒爾せられむことを――。

森耕二郎著「勞賃學說の史的發展」

小 泉 信 三

著者が前年公にした「リカアド價值論の研究」は先進學者の研究の綿密なる涉獵に基づき、而かも其間幾多の獨創的なる工風の跡を示せる、リカアド研究者の看過すべからざる著作であつたが(本誌第二十卷第三號に三邊教授の紹介あり)森氏は更に標記題目の下に其前著と關係淺からざる賃銀學說の發展に就いて其研究の成果を發表せられた。本書は全篇を分つて六章となし、時代からいへば、フイジオクラアトから最近のクラアク、マアシヤル等に至る賃銀學說の發展を叙し、且つ之に批判を加へたものである。右六章の標題を順次に記せば、フイジオクラアトの勞賃論と純收入説「アダム・スミスの勞賃論と價值論」「リカアドの勞賃論とマルサスの人口原理」「勞賃基金説と勞働組合運動」「マルクスの勞賃論と資本蓄積の法則」及び「生産力説と勞働生産力の概念」であるが、右の中紙數を費すこと多き點からしても、又その文字の精彩に富める點からしても、著者の最も力を用ゐたのはリカアド・マルサスに關し及びマルクスに關する第三第五の二章であつて、アダム・スミスを論ずる第二章が此に次ぐものゝ如く察せられる。

著者は賃銀學說の全體を大別して(イ)生存費説(ロ)勞賃基金説(需要供給説)及び(ハ)生産力説となすものゝ如くである。尤も此類別は「最も人口に膾炙し、又最も多くの學者の用ゆるところの種別系列」として擧げられたものではあるが(五頁)併し著者は大體此類別を承認してゐるやうに見受けられる。而して(イ)を主張するものはフイジオクラアト、アダム・スミス(「斯様にスミスの勞賃論

には曖昧と混亂とがあるにしても、彼れの勞賃論の最も本質的なものとしてフィジオクラートから承け継かれたところの生存費説が擧げらるべきことは疑はれない(一〇四頁)及びリカード等、次に第十九世紀の中葉頃英國經濟學界に於て大なる勢力を振ひ、約三四十年ほどの間その代表的勞賃説となり得た(ロ)を主張するものは、スチュアート・ミル、ケアンズ其他、而して(ロ)の後を承けわけても新興の北亞米利加を支配とし、世界の凡ゆる國々に於て、様々の有力なる代表者を得て今日に及べる(ハ)を代表するものとしては、ウオオカア、クラアク等が擧げられて居る。

生存費説の代表的なるものはリカードの其れであるが、リカードの賃銀説の根據となつてゐる人口原理は森氏の承認せざる所である。氏の立場は、「一の歴史的生産方法は其に特有なる一人人口原則を有するものであつて、抽象的な人口原則は未だ人類が歴史的に干渉しないところの動植物に於てのみ存する」といふマルクスの立場である——少くも最もそれに近いものである。従つてマルクスの人口論を發展擴充せしめたカウツキの所論は氏が多大の興味を以て引用紹介する所である。賃銀基金説に對しては氏は全體に於て否認の意を表して居る。確定的なる賃銀基金額なるもの存せざること、賃銀の現象形態と其基本的規定とを同一視すること、資本家の生産關係の何物をも説明し得ざること及び一面に於てマルサスの人口論と密接なる關聯を有することが、其欠陥として森氏の列記する所である(三四二頁)。生産力説の當否に就いては、著者の態度は必しも明確ではない。而かも氏は大體に於て、勞働生産力の増進は賃銀を騰貴せしめずして却て「勞賃は勞働生産力に逆比例的に變動する」と爲すマルクスを是認するものの如く解せられる(四九六頁以下)。

是に由ても知らるゝ如く森氏は最もマルクスの學說に同感せらるゝもので、他の大概の學說を批評する場合には、それに對するマルクスの評言を引用して、是に決定的の權威を認めらるゝを常とする。然らば、マルクス其人の賃銀學說は、上記三説の何れに屬するものであるか。氏は賃銀基金説が承認せられ而して設落しつゝあつた反面に於てリカードの賃銀論が二人の人に依てそれ〴〵の意味に於て繼承又は發展せられてゐた。「マルクスの勞賃論およびラサールの勞賃鐵則説は即ちそれである」と言つて居られるから(三六八頁)、マルクスの賃銀論もリカードと同じく生存費説に屬すべしものであるか。併し乍ら、マルクスは其初期に於てこそリカード祖述に満足したれ「資本論」中に展開せらるゝ所に由れば、彼の説はリカードとは余程趣を殊にするものとなつた。即ち賃銀は賃銀資本(可變資本)と勞働者數の割合に由て決せらるゝこととなり、此割合の如何に由ては、賃銀は生活費から以上以下何れにも離れ得ることとなつたのである。而して斯る場合に、騰貴した賃銀を再び下落せしめ、下落した賃銀を再び騰貴せしむるものは何であるか。評者の見得る限りに於ては、賃銀の騰貴は、余剩價值を減少せしめ、斯くして資本蓄積の勢を阻止するか、或は機械の勞働代用を促して可變資本部分を減少せしめて以て賃銀を下落せしむるか何れかであり、賃銀の下落は是と反對の作用を爲すものである。併し、此の如くして賃銀の上下動搖が行はれても、その動搖は必しも生活費を中心とするものではない。故にマルクスの賃銀論を生存費説とすることは可なり異論を免かれぬ所であらうと思ふ。併し彼れが勞働力の價值は生活費に由て定まるとしてゐること疑を容れぬ。そこで勞働力の價值は斯の如くにして定まり、而して賃銀は彼の如くにして定まるものとすれば、勞働の價值は賃銀を決定する上に於て、果して如何なる効力を有するものであるかの疑が起る。

森氏が幾多重要な點に於てマルクスを奉ぜらるるは前記の如くである。氏がマルクスに由て得た利益は固より尠少ならざるものであるが、忌憚なくいへば其代り又他面に於て或損失を蒙ることも

無いではなかつたやうである。氏のマルクス評論が他の諸學者に對するものに比して生氣を欠くもの、如く見受けられることがそれである。マルクス批評として唱へられた數說の中に、嘗て本誌に掲げられた評者の意見をも擧げられたのは、私の榮とする所である。評者はオツペンハイマアに從つて所謂産業豫備軍が資本の高度化(不變資本の割合増大)に依て造り出さるゝものであるならば、資本組成の低度なる農村から都市に向つて勞働者移住の行はれる事實は説明し難いといひ、又ドイツエルに據りはせぬが、ドイツエルをも引用して右にも述べたやうに、賃銀の高下は勞働力の價值に由ては説明せられぬといつたのである(本誌第十九卷第八號「農民の都市流入」及び第二十二卷第三號「價值論の價值」)。此等の點に就き、森氏は何れもマルクスを辯護せられるのであるが、其論據の説明が、當否はいはずとするも、少くも甚だ不十分である(四四八―四五三頁)。マルクスの見地より見て此等の批評は如何に取り扱ふべきものであるか。氏の如き篤學者の説は切に聽かんと欲する所であるのに、それが充分でないのは遺憾である。

斯く不滿の個條は擧げるもの、著者の記述の周到綿密なるは推重措くべからざる所である。原著者の解釋に疑義ある場合、森氏が諄々として幾多の場合に於ける原著者の文句を引き、諸學者の説を叩き、而して後に其判断を下す態度は懇切を極めて居る。アダム・スミスは果して勞働費用説を棄てたりや棄てざりしやの問題を解く場合の如きは於て、殊に此特長が顯れて居る。一讀者として猶ほ注文したいと思ふ點は尠からぬにもせよ、スミス、リカアドオ、マルサス、マルクス等に關する一新文献として、氏の舊著と同じく本書も初學者専門家の共に一讀を怠るべからざる著作なるは疑ない。望むらくは、氏の今多く據つて立てるマルクスに對して、更に周到なる批評を試みて、其の價值ある研究を大成せらるゝ日の近からんことを(弘文堂書房發行、正價金四圓)。

前號 (第二十二卷) 第六號 目次

上海銀行公會の支那國民經濟に於ける地位に就て	及川 恒忠
經濟生學の研究方法来に就て	勝田 貞次
Yves-Guyot 逝く	永田 清
「パボエフ説分析」並びに「パボエフ及びパボエフ主義」文獻小録	平井 新
古代社會に於ける農業の發達	山本勝太郎
「一デユネーツ住民の書翰」に現れたるサン・シモンの思想	小泉 順三
三田學會雜誌第二十二卷前半總目次	

●一冊定價金五拾錢
●半年分金貳圓九拾錢
●一年分金五圓四拾錢

郵税金壹錢五厘 郵税 共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

●營業に關する用件は發賣元宛

●原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和三年六月三十日印刷納本
昭和三年七月一日發行 每月一回一日發行

三田學會雜誌 第二十二卷 第七號

編輯者 江田 範保
發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者 金子 鐵五郎
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子活版所

發賣元 東京市芝區三田丁目壹番地 丸善株式會社三田出張所
電話高輪 一九二六

●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會